

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02422

研究課題名(和文)文学作品における固有名の機能とその受容についての研究 ドイツ語文学の場合

研究課題名(英文)Functions of literary names in german literature

研究代表者

前田 佳一 (Maeda, Keiichi)

お茶の水女子大学・外国語教育センター・助教

研究者番号：70734911

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトは文学作品において固有名が有する機能について、中世から現代までのドイツ語圏文学における人名、地名を対象に、個々の作品のケーススタディを通じて検証した。その際には、とりわけ<神話化>ならびに<錯覚形成>という機能に着目した。結論として、文学的固有名には<産出性>、<虚構性>、<否定性>という三つの契機が認められることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：In this project, the functions of proper names in German literature from the Middle Ages to the present were examined. The focus was particularly on the functions of “Mythologizing” and “Fictionalization”. The findings clearly revealed that three essential aspects, that is, “productivity”, “fictionality”, “negativity” are recognized in proper names in literary texts.

研究分野：ドイツ語圏文学

キーワード：固有名 ドイツ文学 オーストリア文学 集合的記憶 虚構性

1. 研究開始当初の背景

文学作品において用いられる固有名(以下「文学的固有名」)がいかなる機能を有しているかということに関する研究はこれまで言語学、言語哲学の二分野における固有名研究の強い影響下にあった。本プロジェクトの代表者は、従来の研究で提示された論点に加え、文学研究の手法ならびに近年の記憶研究やメディア論といった文化研究の手法を用いつつ、このテーマに取り組むことによってより包括的なかたちで文学的固有名の機能を解明できると考えた。

2. 研究の目的

文学的固有名がいかなる機能を有しているのか、そして各時代の文学的固有名がいかなる形で過去のそれを受容し、また後代の文学作品のそれに影響を与えているのか、という、文学的固有名を作品内在的研究と歴史的研究の両面から研究するための基盤構築を目指した。

3. 研究の方法

中世から現代までのドイツ語圏文学の諸作品のケーススタディを行なった。代表者の前田は主に20世紀文学(とりわけハイミート・フォン・ドーデラーやインゲボルク・バッハマン等のオーストリア文学)、江口は18、19世紀の文学(とりわけジャン・パウル)、山本は中世文学(とりわけ英雄叙事詩)の分析を担当した。Debus(2002)らの先行研究において提示されている機能分類のうち、特に「錯覚形成(Illusionierung)」と「神話化(Mythisierung)」に着目し、文学的固有名がいかなる形で作品の虚構性の形成に寄与しているのか、そしてその文学的固有名が後代に受容される際にいかなる形でその虚構性のありようを変容させていくのかという問題を明らかにすることを試みた。また分析にあたっては、文学と社会史との関係や各時代のメディア状況にも留意した。

またこれらの点に関し、研究分担者・研究協力者以外の複数の国内の研究者たちとも複数の研究会の開催や期間中二度のシンポジウム開催を通じて連携し、議論を深めた。

4. 研究成果

文学的固有名は<産出性>、<虚構性>、<否定性>という三つの契機が存しており、作品分析の際にはこれらに着目すべきであることを明らかにした。文学作品内の虚構世界が形成される際に固有名は中心的な役割を担う(虚構性)が、そのことによって文学的固有名においては名前と対象との間にある種の神話的一体性が形成される(産出性)。しかし文学は、このような固有名をめぐる神話的一体性が解体されてゆく契機もまた、繰り返し主題としてきた(否定性)。固有名はその対象と不可分に結びついた唯一無二のものである一方で、単なる代替可能な記号で

もあるという両義性を有する。ドイツ語圏文学は古くからその両義性に何らかの形で取り組んできた。そこには、度重なる政治的混乱によって<固有名>とその指示対象の一体性の自明性が常に揺るがされてきたという社会的な背景も密接に関連している。

本プロジェクトは上記の点について、二度のシンポジウム開催と二冊の論集(日本独文学会研究叢書)の刊行を通じて明らかにしてきた。本プロジェクトによって、これまで包括的に取り組まれることの少なかった文学的固有名をめぐる議論を国内に喚起することができたと自負している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計12件)

前田佳二、戦後オーストリア文学の起源をめぐって、日本独文学会研究叢書『人殺しと気狂いたち』の饗宴あるいは戦後オーストリア文学の深層_Ⅱ、査読なし、126号、2017年9月、2-9頁

山本潤、オーストリアにおける「ドイツ国民叙事詩」研究 - 『ニーベルンゲンの歌』の「オーストリア性」、日本独文学会研究叢書『人殺しと気狂いたち』の饗宴あるいは戦後オーストリア文学の深層_Ⅱ、査読なし、126号、2017年9月、10-26頁

前田佳二、ハイミート・フォン・ドーデラーにおける「間接的なもの」の詩学、日本独文学会研究叢書『人殺しと気狂いたち』の饗宴あるいは戦後オーストリア文学の深層_Ⅱ、査読なし、126号、2017年9月、72-88頁

山本潤、記憶と忘却 『ニーベルンゲンの歌』の伝承において形成される黙示録的構造、ドイツ文学、査読有り、154号、2017年5月、18-39頁

山本潤、英雄たちの黄昏 『ニーベルンゲンの歌』および『ニーベルンゲンの哀歌』に見る英雄性への視線、人文学報、査読有り、第513-514号、2017年3月、49-66頁

前田佳二、「オーストリア的なもの」の復興をめぐる諸問題 - 雑誌『プラーン』ならびに『トゥルム』を手がかりに、日本独文学会研究叢書『ウィーン1945-1966 - オーストリア文学の「悪霊」たち』_Ⅱ、第114号、2016年5月、3-17頁

山本潤、中世ドイツ文学に見るローマ観 - 『ディートリヒの逃亡』および『皇帝

年代記』を題材に、西洋中世研究、査読有り、7号、2015年12月、97-117頁

前田佳一、名前の詩学への導入 - インゲボルク・バッハマンの講演『名前との付き合い』をてがかりに、日本独文学会研究叢書『名前の詩学 - 文学作品における固有名あるいは名をめぐる諸問題』、査読なし、第110号、2015年10月、3-17頁

山本潤、作者と名前 - 中世俗語文芸における作者性、日本独文学会研究叢書『名前の詩学 - 文学作品における固有名あるいは名をめぐる諸問題』、査読なし、第110号、2015年10月、18-33頁

江口大輔、『ジーベンケース』における名前の交換、日本独文学会研究叢書『名前の詩学 - 文学作品における固有名あるいは名をめぐる諸問題』、査読なし、第110号、2015年10月、34-43頁

山本潤、「ディートリヒの逃亡」における「作者」像 - ジャンル交差の諸相から、詩・言語、査読有り、第81号、2015年9月、61-90頁

Jun Yamamoto、Konzeptionen der Geschichtlichkeit in der genealogischen Vorgeschichte von Dietrichs Flucht、Neue Beiträge zur Germanistik、査読有り、Nr. 151、2015年5月、75-91頁

[学会発表](計8件)

前田佳一、戦後オーストリア文学における旧世代と新世代 - 雑誌『トゥルム』をてがかりに、ドイツ現代文学ゼミナール、2018年3月8日、強羅静雲荘(神奈川県・足柄下郡)

前田佳一、名前の廃墟 - インゲボルク・バッハマンの固有名の詩学、シンポジウム「名前の詩学 - 文学作品における固有名と否定性の諸相」、2018年2月11日、東京大学(東京都・文京区)

Jun Yamamoto、Memory and Oblivion. Apocalyptic Structure Formed in Nibelungen-Book、International Symposium "Creation and Destruction of the World"、ソフィア大学(ブルガリア)、2017年11月3日

前田佳一、ハイミート・フォン・ドレーラーとインゲボルク・バッハマンのウィーン、日本独文学会春季研究発表会シンポジウム「固有名と虚構性」、2017年5月28日、日本大学(東京都・世田谷区)

江口大輔、ジャン・パウル『自叙伝』における作者の固有名、日本独文学会春季研究発表会シンポジウム「固有名と虚構性」、2017年5月28日、日本大学(東京都・世田谷区)

前田佳一、ハイミート・フォン・ドレーラーにおける「間接的なもの」の詩学、日本独文学会秋季研究発表会シンポジウム「『人殺しと気狂いたち』の饗宴あるいは戦後オーストリア文学の深層」、2016年10月23日、関西大学(大阪府・吹田市)

山本潤、オーストリアにおける『ドイツ国民叙事詩』研究、日本独文学会秋季研究発表会シンポジウム「『人殺しと気狂いたち』の饗宴あるいは戦後オーストリア文学の深層」、2016年10月23日、関西大学(大阪府・吹田市)

前田佳一、「オーストリア的なもの」の復興 - 戦後ウィーンの文学・芸術雑誌を手がかりに、日本独文学会春季研究発表会シンポジウム「ウィーン 1945-1966 - オーストリア文学の『悪霊』たち」、2015年5月30日、武蔵大学(東京都・練馬区)

[図書](計2件)

Japanische Gesellschaft für Germanistik (編)、Kotaro Isozaki, Dennis Senzel, Yuko Nomura, Jisung Kim, Keiichi Maeda, Naoko Sutou, Ulrike Vedder, Misa Fujiwara, Michael Mandelartz, Martina Wagner-Egelhaaf, Leopold Schlöndorff, Naobumi Oshima, Wei Hu, Yusuke Aramata, Hiroki Chino (著)、Nachleben der Toten - Autofiktion, iudicium、2017年、249(80-90)頁

小澤実、中丸禎子、高橋美野梨(編)、池田弘、石橋悠人、伊藤盡、入江浩司、梅澤薫、大場満郎、岸上伸啓、北村紗衣、グヴズルン・ハトルグリムスドゥフティル、糸川麻里生、齋藤圭介、齋藤孝祐、佐藤元信、清水誠、菅原邦城、スチュアートヘンリ、田淵宗孝、藤間寿紀、永井忠孝、永井真美、成川岳大、野村大樹、羽佐田和之、花松泰倫、ピリアム・ビーダセン、松本涼、的場澄人、溝口弥生、三村竜之、森脇広、柳橋大輔、山田祥子、山本潤、山本麻由美、幸村誠、ヨウン・カール・ヘルガソン、吉田壮志、吉武信彦(著)、アイスランド・グリーンランド・北極を知るための65章、明石書店、2016年、456(334-338)頁

6. 研究組織 (1) 研究代表者

前田 佳一 (MAEDA, Keiichi)
お茶の水女子大学・外国語教育センター・助教

研究者番号：70734911

(2)研究分担者

江口 大輔 (EGUCHI, Daisuke)
早稲田大学・法学大学院・准教授

研究者番号：90626285

山本 潤 (Yamamoto, Jun)
首都大学東京・人文科学研究科・准教授

研究者番号：50613098

(3)研究協力者

桂 元嗣 (KATSURA, Mototsugu)
武蔵大学・人文学部・准教授

木戸 繭子 (KIDO, Mayuko)
中央大学兼任講師